

2022年度 大谷大学文藝コンテスト
審査員からのメッセージ（エッセイ・小説部門）

一般社団法人言の葉協会 専務理事 宮脇一徳

コロナ禍の中での「大谷大学文藝コンテスト」の審査が終了した。応募はかなり落ち込んだが、私は思ったよりたくさん頂いたと思っている。昨年に比べかなり落ち込んだエッセイは楽しく読ませて頂いた。小説も昨年に比べ半減したが、これも力のある作品が寄せられ、審査に多くのエネルギーが費やされた。ほろっとする作品やこれはいまいと思える作品も見つけられ、とても楽しい審査会となった。コロナ禍の影響は否定できないが、生活面や学校での授業など多くの制限・制約を乗り越えてたゆみない創造力で寄せられた作品は、とてもステキで楽しく、難しい熟考した内容の作品には手こずったがレベルの高さを見つけられた。エッセイも小説もテーマの設定や論旨に工夫がみられ「なるほどなあ」と頷かせるような作品にも出会えた。こんなアプローチがあるのだなと、とても参考になりました。おばあちゃんのこと、食のこと、旅や愛情、絵画、祭りの話、数学、夢想など、テーマや素材の引き込み方は無難にまとめ、全体に愉快で楽しい作品がずらっと並び、多彩な創作活動を彷彿させ、まさしく創造の時空を突き進んだ世界観が見受けられ、今回も文藝コンテストの成長を頷かせるものとなった。コロナ禍があければ、さらに多くの多彩な作品が寄せられることを願って、次の応募を楽しみにしています。ありがとう。